



「太陽のない街」の時代 『右往左往 五十年の過去』

(1) 震災で救出作業に当たる大橋光吉社長

(当時の共同印刷) に感銘

史談会開催日

昭和 54 年 (1979 年) 4 月 3 日

私の話は歴史的に意義があるわけでもありませんし、また社会性などありません。まったく私の個人的な主観で身边のお話をさせていただきただけですので、この点ご了承ください。また、3 月末にインドネシアのほうに旅行しましてその帰りの飛行機の中で思い出すままにメモをとってみましたが、まとまりのない話になると思いますけど、よろしくお願ひします。

私どもの会社が 50 周年を迎えたのを記念して 50 年の 1 月に、「右往左往 50 年」の本を出しましたが、これは会社のことなどもそうふれておりませんし、私が業界紙とか地元の新聞に頼まれて書きなぐったものをまとめたものですが、右往左往ということばだけは私にぴったりしていると思います。

築地小劇場の思い出

まず私の少年から青年時代にかけて、築地小劇場のことは無視出来ない一つの過程ではなかったかと思います。築地小劇場はご存知のように小佐内薫さんがお作りになって、千田是也さんとか東山千栄子さんとか、山本安英さんといった人々が、新劇を育てた過程であったと思います。これは単に私が新劇に魅かれたということだけでなく、今の新劇にいかに大きな役割を果たしているかを感じるわけです。

例えば、“朝から夜中まで”という劇とか、“桜の園”など、今でも深く印象に残っており、どこかでやるなら今でも見に行きたいと思っているほどです。そういうことで築地小劇場のことをお話したものです。

■ 語る人

中村 榊 氏

(新興印刷製本社長)

惨胆たる関東大震災

私は博文館に入りまして工場出勤簿の整理をしたり、成績表を作ったりという雑用ばかりしていたのですが、どうも時間が余ってしょうがないものですから、欧文を拾ってみたり、見よう見真似で版を組んでみたりして、結構一人前の植字工になったのではないかと考えています。

この博文館にいました時に大震災が起きまして、新館の5階か6階建てだと思いますが、この鉄筋コンクリートの新館がめちゃくちゃにつぶれてしまいました。確か40人ぐらいの犠牲者が出たと思います。

私は当時職長のうちに下宿していたものですから、早速かり出されて救出に当たりましたが、なんとといいますか、言葉に言い表わせないほど惨胆たるもので、鑄造の女の子達が枕を並べて死んでいたり、あるいは足を鉄まれて「この足を切ってどうして助けないのだ」というようなことを叫んでいる人もいるなど、実に悲惨な状態でした。

私は見ていられない惨状でして隅っこのほうで文選箱など散乱していたものを片づけていましたら、ちょうど大橋光吉さんがお出でになりました。私どもは共同印刷の社長さんにお目にかかることはほとんどなくて年1回工場を見廻りにお出でになる時、大橋さんの顔を見ることぐらいでした。

その時大橋さんが率先して救出作業にお出でになったんですが、私の記憶では会社の幹部の顔はほとんどみえなかったようでして、そういう中で大橋社長が自から救出作業をいろいろ指揮されたことについて、私は子供心にもさすがに社長さんは違うなァという感銘を受けました。

たまたま私が文選箱を片づけておりましたら「おまえはえらいことをしているなあ、感心だなあ」とほめられた記憶があります。このように救出作業に数日を費やしたわけです。

何しろ私は独身でしたし、震災に遭っても失うものは何もありませんでしたので、恐いことではありましたが、震災後の街を見て歩いたものです。街に出ますといたるところに死体がころがってしまっていて、墨田川辺りには母親が子供の手を引っ張ったまま浮いているというような状態だったんですが、そうしたことをいろいろ考えま



すと、私は震災もいい経験をしたというように思います。

その時私が共同印刷として忘れることの出来ないことは、私は第一製版課というところにおりまして、5号活字のところでしたが、朝日新聞を5号活字で組んだ記憶があります。何日間朝日新聞をやったか記憶はありませんが、2、3日は確かに私どもの手で朝日新聞を大きい5号活字にルビをつけて組んだのを憶えており、こうしたことが震災について鮮やかに印象が残っているわけです。

ご承知のように関東大震災では朝鮮人事件がありました。あの事件についても私など見てきましたが、何もしない朝鮮人を片っぴしから殺したりしまして、あのような災害における群集心理をつくづく感じるわけです。

ちょうどその頃亀戸事件と言うのがありまして、南葛労働組合という戦闘的な労働組合でしたが、この時10何人が殺されるということで、平沢という有名な労働指導者を始め何人かの労働者が震災の時殺されたわけです。後の国策パルプの副社長をおやりになった南喜一さんが、自分の兄弟かが亀戸事件に巻き込まれて殺されたということで、いままで南さんは自分で営業されていたそうですが、それを投げ捨てて労働組合にお入りになったという話も聞いております。

当時は商業学校を出て月給は27、8円ぐらいで、帝大を出て初任給は60円という相場でしたが、学校を出てもやはり3分の2ぐらいしか就職出来ず、3分の1ぐらいは浪人でした。私はそうした有望な会社に入れてもらい、月給は破格の45円をもらいましたが、みな先輩のお蔭です。

(2) 仕事をすると叱られる「太陽のない街」時代の回顧

共同印刷争議の発端

共同印刷の争議については大正13年がきっかけではなかったかと思えます。その当時、私はほんの小僧っ子でございますし、中枢部にいたわけでもありませんので争議の経過とか原因などについては全然わかりませんでしたが、子供なりに感じたことをいろいろ話してみたいと思えます。



第一回の争議は工場内における喧嘩か、職長が従業員を殴ったというようなことで起こったらしいですが、私の記憶では威勢のいい印刷の人達が私どもの職場に怒鳴りこんで来まして、「ストライキをやらおうとしているのに、なんでお前達は仕事をしているんだ」と言われ、みんなびっくりして仕事をやめてしまったことがありましたが、こうしたことが大正13年のストライキだったと思います。

このストライキは労働者側に有利に解決したような気がしますしそれで労働組合が出来たわけです。当時はHPクラブと言いまして、Hは博文館、Pはプリンティングだと思いますが、当時はっきりと労働組合と名乗ることが出来なかったのが当時の共同印刷の実情だったと思います。

HPクラブが出来て、非常にいろいろ活発な活動をしたわけですが、というのはいわゆる革新的な思想を吹き込むために、絶えず集会などやって従業員の教宣をしていたようです。その時に徳田球一さんあたりが盛んに来ましたが、当時の徳田さんは新進弁護士で非常に元気がよく、半分ワイ談をやりながら話を聞いた記憶があります。

そこでHPクラブが非常な力をつけてきて、私は職場で成績や売上げなどをつけていたのですが、能率はガタ落ちでした。というのは、真面目に働いていると、HPクラブの幹部の連中に怒られるということで、ほとんど仕事をしなくなり、平均の作業量からうんと落ちてしまいましたが、これは新しい傾向だと思えますけど、労働組合が力をもってきて、職場の幹部の連中の発言権がなくなってしまったというような状態ではなかったかと思えます。

人員整理から始まった大争議

こうしたことが1年か2年続きまして、大正15年にあの大きなストライキに入るわけですが、この争議は浜松の日本楽器の争議と並びまして、日本の2大争議と言われたわけですが、60日間という話ですけど私はもっと長かったような気がしております、とにかく長いストライキであったということです。

この原因は、鑄造課の連中の人員淘汰か何かが、原因だったと思いますし、一般作業員の賃上げというようなことでは決してなく、全く会社側の人員整理に対する一つの抵抗ではなかったかと思えます。そこまで従業員が労働組合に訓練されてしまっていたと思えてならないわけです。



このように一般労働者の賃上げとか時間短縮というような問題でなく、全然個別の問題であれだけ長いストライキをやったということは、当時、労働総同盟の右翼の組織に対抗して、日本労働評議会という左翼、共産系の全国団体に共同印刷が入っていて、すでに労働組合と名前も変えていましたけど、私はこの評議会の指導で争議があのように紛糾し長引いたと、思えてならないわけです。ですからあくまで経済的な闘争でなく、革命の予備行動だと、私は今でも考えています。

もう共同印刷だけの争議というよりも、日本労働評議会の争議でして、評議会の幹部連中がほとんど来ておりました。例えば渡辺正之輔さん、三田村四郎さん、南喜一さんなど、当時左翼のそうそうたる連中が争議を指導して、従業員の経済的問題でなく、一つの革命の予備行動であったというような気がしてなりません。

争議中は警察暮しが大半

その時争議に大きな役割をしたことは、消費組合共働社というのを従業員がもっておりまして、ここで米とか日用品など取扱っており、ここで米とか醤油、味噌など提供したわけです。これが争議の裏の台所を支える一つの大きな力になったのではないかという気がします。

また、私どもは行商隊を組織しましていろいろな物を売って歩いたんですが、私は労働組合が行商をし始めたのは共同印刷の争議が最初ではなかったかと思います。

もう一つ私が強調したいのは、争議団という闘争形態の他に、共産党の指導で特別行動隊というのを若い連中で作られ、T組織といっておりましたが、これが裏で大きな活動をしたわけです。例えば共同印刷の寄宿生が工場の中に入る噂があるとこれを阻止するために動員するとか、あるいは共同印刷の幹部の行動がわかると、これを待ち受けてドブに叩きこむとか、殴ると、いったことや、それから最後には共同印刷の輪転機に砂をかけよう、ということになりまして、トラック2台ぐらいで行ったようではありますが、これは入口で阻止され、逆に争議団が殴られ帰ってきた、という話も聞きました。

私は当時全くのペイペイで争議団の幹部でもありませんでしたが、絶えず警察に検束されまして、理由は浮浪罪（一定の住所がなくて職業がない）でしたけど、おかしいとは思いますが、その当時予



備検束というのが盛んにやられて、天皇陛下がどこかにお出になるとか、国家の大事な行事の場合は、必ずめばしい人は予備検束で警察に引っ張ってしまうというような時代でしたから……。私も争議の時大半は警察に入ってしまったということでした。

誰が知らしたか田舎から親父が出て来まして、着替えなどもって差し入れに来たんですが、親父は盛んに田舎へ連れて帰るからと言ったんですけど、警察が出してくれなかったのです。その時親父と一緒に田舎へ帰っておれば、今頃平凡な農家のおじいちゃんではないかと思います。

そのように私は大半は警察におりまして、争議の経過もあまり知りませんし、争議のことなど話す資格はないと思いますが、私の印象としては、全く共産党系の評議会の争議であったという感触を今でももっています。

(3) 私の下宿で書いた徳永氏『太陽のない街』清書を手伝う

『太陽のない街』と争議

私は労働組合があそこまでハネを伸ばして行ったことは、会社が従業員を甘やかすというか、融和政策をおとりになったといえますか、非常に組合に対して恩恵的な方策をとられたと、私は子供なりに感じたわけです。

例えばソビエトの要人が日本に来て、大正時代ですから大変なことですが、共同印刷をお見せになるということでしたが、これは労働組合の要求もあったかも知れませんが、どこの会社でも断わるのですから、断われたと思いますが、ソビエトの要人に共同印刷を見せるといったことでした。確か当時は三田村という支配人がおられたと思いますが、その方が非常に進歩的というのかわかりませんが、融和政策をおとりになって、従業員を甘やかされたという気が、私にはしてならないわけです。

そういったことも争議が長引いた、共同印刷の労働組合が強くなった一つ原因ではなかったかと思います。そういう点で例えば凸版あたりには私どもビラ撒きなど行っていました。凸版の井上さんには当時「首切り源之丞」という名前がついていました。大日本にもいろいろ働きかけましたが、凸版にしる、大日本にしるたいして動揺はなかったのに、共同だけが非常に強い労働組合が出来たことは、



やはり会社の指導部の方々が非常に進歩的と申しますか、物分りが良過ぎたのではないかと思います。

当時会社側にいらしたのが大熊整美堂の大熊さんとか、あるいは亡くなった井関さんとか、やはり亡くなった双葉の大野さんなどで、後で話を聞きますと、いろいろ仕事を方々にもって行って大変苦勞なさったようではありますが、このことは後でわかったことでございます。

共同印刷の争議というと、すぐに『太陽のない街』が出てくるのですが、徳永直が書いたものですが、あれを書く時には家が狭くて、子供が3人いて書く場所がないと言うので、私が神楽坂のアパートみたいなところにいたものですから、彼は私のところに毎日弁当をもって書きにくるわけです。私は嫌だなアと思って、日記など隠した記憶があります。

あの本は私の下宿で書いた本で私も原稿の清書を手伝ったりしましたが、その原稿が売りに出ている話を聞いてびっくりしまして、これは私が書いた原稿ではないだろうかと思い、いささか恐縮しているところです。

『太陽のない街』はあくまでも小説でして、私どもも争議団の1人として納得のいかないところもありますけど、小説ですからそうやかましくいうこともないだろうと思います。

争議の終結について

もう1人、橋本栄吉という人がおりまして、これは共同印刷の従業員でしたが、文芸春秋の菊池寛さんに非常に可愛いがられまして文芸春秋に入って相当長く作家活動をしておりましたが、先年伊豆の大仁で亡くなりました。このように、共同印刷の争議から2人の作家が出たわけです。

それともう一つ忘れてはならないのは、争議団があちこちに分宿しておりまして、お寺を借りたり、方々に缶詰になっていたものですが、そこにトランク劇場というのがやってきて、慰問のお芝居をしてくれたわけです。

このトランク劇場というのは、今でも元気ですけど、佐々木孝丸さんが担当しているいろいろ芝居をして争議団を慰労してくれたわけです。このトランク劇場が発展をして、新潮劇団とか、左翼劇場になっ



たと私は解釈しております。

この佐々木孝丸さんは、ご承知のように大体は文筆家であって、演劇出身ではなかったのですが、芝居が好きで今でも演劇のほうで活躍しておられるようですが、私はトランク劇場が左翼劇場の一つのはしりではないかと思います。

争議の結果につきまして、争議団全員解雇でして、争議の調停者は確か王子製紙の藤原さんと、ダイヤモンド社の石山さんが仲介をとっておられたということです。

いろいろ後で資料をみますと、評議会もすっかり手をあげて、なんとか決着をつけたいという意味もあったようで、早く言えば無条件で解決したということではなかったかと思います。その時若干の手当をもらいましたけど……。

争議をやめると同時になんか東京の印刷業界にブラックリストが回ったという話でして、団長級は初号活字、そして団員は小さな活字までで、方々の会社に回ったと聞きましたけど、私は噂を聞いただけで見たこともありませんし、私は名前が載るような仕事もしておりませんので、私の名前はなかったかと思います。

このようなブラックリストが出て、共同印刷の争議に参加した連中は、ほとんどよその工場で働けなかったということです。その当時非常な不況でして働くところがなかなか無かったというのが実情ではなかったかと思います。そこでみんなが名前を隠して臨時で働いたり、いろんなことをしたようです。その時贋造紙幣を作ったらしいという話が出ましたが、私は、大半はデマだと思います。争議団に参加した連中は生活に非常な苦勞をしたというのが実際ではなかったかと思います。

出版労働組合常勤時代

私も働くところありませんでした、植字工でもなかったものですから、どこにも行くところがなくて、出版労働組合の事務所でごろごろしておりまして食うや食わずの生活を半年ばかりやっておりました。そして見よう見まねで方々のストライキに行ったりしましたが、私が一番印象に残っているのは雑司ヶ谷の従業員が14、5人いる小さな工場でしたけど、ここのオヤジさんが従業員の給料を払わない、従業員が食堂で食べた食事代もその食堂に支払わなかったりして、従業員が困っていたことがありました。

その当時は今と違いまして、いわゆる会社の経営者というのは、したい放題のことをしたといえますか、今のように労働基準法があるわけでもありませんし、私はなかには非常にひどいことをしていたと思います。私はその工場に荷車をもって行きまして、その活字をどンドンカマスにつめこんで積み出し、売り払って従業員の給料に分けたり、食堂に支払ったのですが、今考えてみると窃盗みたいなもので、若さのせいでしょうか、ムチャなことをしたと思い、今でも印象に残っています。

組合で働いていまして、評議会の指導方針と言いますか、労働組合についていけない面がたくさんありまして、例えば失業者が出れば出るほど革命が近くなる、ということで、失業者を出すような運動をしているわけです。

私は働く人の生活を全く無視した機械的なやり方ではないかと思いますが、当時はそうしたことを平気で言われ、失業者を多くすることに力を入れるというような労働組合のあり方でして、それから革命が明日にも来るというような錯覚をさかんに教育された、ということで、私は半年ばかり出版労働組合にいたのですが、これではついていけないという気がしまして組合をやめました。

(4) 仲間と作った生産組合本出せば発禁扱い、増える借金

共働印刷生産組合の結成

出版労働組合をやめて、徳永直を始め数人で「印刷工場を作ろうではないか」ということになり、「共働印刷生産組合」というものを作りました。これは協同組合運動の一端でして、一方に消費者の消費組合があるので、ではもう一方には生産組合があってもいいのではないかということで始めたわけです。

これには賀川豊彦さんや平凡社の下中弥三郎さんらの資金的援助を受けました。下中さんは私どもには非常に理解のある方で、いつ行ってもいろいろ教えていただいたり、力をつけてもらっていたものですから、その時も資金を出していただき、6、7人ぐらいの小さな工場を作りました。

この生産組合では、利益はみんな均等に分けよう、また、発注者にも利益があったら戻そう、という誠に立派な仕事を始めたわけ



ですが、仕事を始めるといっても私どもは素人でした、営業の経験もありませんし、仕事がなかなかとれないという状態でした。

しかし、争議をやっていた関係上、革新的ないろいろの団体と連絡があったものですから、左翼の出版物が受注出来、それ専門のような格好になりました。『プロレタリア芸術』とか『文芸戦線』、また、全日本無生産者芸術団体協会の機関紙『ナップ』、それから『戦旗』という雑誌などを主にやりましたが、これらはほとんど発行するたびに発禁になるというものばかりでした、私どもが本を作ると同時に押さえられるということが再々ありました。

多くの作家とのつき合い

それでも私どもは何年か頑張ってきました、今でもその当時の方々と懇意にしてもらっています。その当時、宮本顕治さんがよく来ておりましたけど、まだ学生でしてちょうど中央公論でしたか『敗北の文学』という論文が懸賞の1等になりました、こうしたことから宮本さんが文人として頭をもたげてきたのではないかと思います。私の印象は、宮本さんはあくまでも文筆家であって、いわゆる政治家でないという気が今でもするわけです。

そのほか壺井栄さんなど、作家がたくさんいるわけですが、例えば佐多稲子さんは、当時は窪川稲子さんと言いまして、『チャルメル工場』など書いて非常に売れた作家です。今、講談社から佐多稲子全集が出ていますが、佐多さんと非常に懇意にさせてもらって、本をお出しになると必ず送っていただいております。

これは佐多さんが家をおつくりになる時に金が足りなくて、私が1万か2万か立替えたという記憶があるのですが、それを何年か経ってわざわざ佐多さんがお返しに見えました。私は返してもらおうという気もなく、とんと忘れていましてびっくりしたのですが、そういつたことがあります、私どもの工場が非常に印象深かったとみえて、佐多さんの本が出ると送っていただいているということです。

徳永直の再婚に媒酌の労

徳永直が『太陽のない街』を書き、作家になって、『妻よ眠れ』で妻君が亡くなったことを書いていますが、その時、中学に入っている子供達を3人も抱え、家庭の雑用に追われ、非常に困っておりまして、どうしても妻君をもらわないと仕事が出来ないということで、彼もあせっております。私が、『右往左往……』にもちょっと書きましたが、壺井さんの妹さんが四国にいらして先生をしていました



が、佐多稲子さんの紹介で徳永氏と結婚式をあげたのですが、その媒酌人を私がつとめたわけです。

また、徳永の娘さんと、渡辺順三さんの息子さん（いま共産党の代々木にある印刷工場の支配人かなにかをやっておられるようですが……）の結婚式も私が媒酌人をしたということで、こうしたことから私は深い関係があったわけです。

そして壺井さんの妹さんと徳永直の結婚がうまくいかずに別れてしまい、いろいろトラブルがありましたが、このことを壺井さんは『妻の座』とか、いろいろな小説でお書きになり、片や徳永氏もその経過など書いて反発する、ということで、当時の文壇をに賑わしたものでした。

徳永氏に言わせると、前の妻君が非常に小柄で可愛い奥さんだったのですが、壺井さんの妹さんは非常に大柄で、壺井さんをご覧になってわかるように、器量も壺井さんに似ていらして、徳永氏は今度の女房は手も大きいし、足も大きいし…、とこぼしていたことを私は今でも記憶にあります、いろいろトラブルがあっとうまくいきませんでした。

私は第三者としていろいろ感想はありますが、壺井さんも今月の全集でこのことに触れていましてあの問題は自分も触れたくない、ということをおっしゃられましたし、私も両方からいろいろ手紙をもらいましたけれど、結局、男と女の問題ではないかと考えますが、そうした問題に私はタッチせざるを得なかったということです。

1 人借金を背負った生産組合

このように革新的な仕事をほとんどやっておりまして、今までもあの小石川林町の工場の跡はどうなったんだろうと考えます。あれは日本の進歩的作家活動の一つの拠点だったから、なんとかあのままにしておきたいなあという人もおりましたが、もう崩れてしまいました。

それはともかく、本は出すと発禁になり、また、相手がいわゆる作家の団体ですから資金がありませんので、なかなか印刷代がもらえません。私達の工場でも給料も払えない状態が続いたわけです。相手も商売でやっておられる仕事ではなく、一つの運動ですから、私どももそういう点の理解はしておりましたが、現実的に生活が出来ない状態にして、正月には知り合いからお餅をもらって、正月



を過ごしたこともありました。

そういうことで、生産組合の仲間も1人去り、2人去り、ついには、ほとんど壊滅状態になり、残ったのは私だけでした。私1人が借金を背負って残ったのです。

戦争も始まり、社会的情勢も変わってきましたので、思い切って革新的な仕事から手を引いて、個人経営の工場にしたわけでございます。

(5) 借金背負って独立へ“半農半工”で工場疎開

個人経営としてスタート

個人経営になっても当初は仕事がなく困ったのですが、有り難いことに今までの生産組合時代の作家や編集者が、自分達の作家活動が出来ないので方々の出版社に入っておられたものですから、それが一つの縁で新しい得意先が思いのほか早くもられました。

こうした戦争前からのお得意は未だに6、7軒残ってしまして、私は印刷業者として冥利に尽きると思いますし、40年も50年も長い間お仕事をもらえるということは大変有り難いことだと思っています。そして個人経営を始めてから、差押えなどされたこともあります。いろいろ和解してもらったり、また借金も月賦で返してなんとか軌道に乗るようになってきました。

新興印刷製本の設立

その後、大東亜戦争に突入しまして、企業整備が至上命令として通達されましたが、当社は幸いに整備の対象からはずされて残ることが出来ました。その際、数社と一応企業合同しましたが、それは表面だけのことで、各社の機械、資産など一切は従来のまま、全く名目だけの企業合同で、その中に製本工場が1社あったことから、社名を「新興印刷製本株式会社」と改めた（昭和20年5月、社長に中村榊氏が就任）のですが、企業合同は架空に等しいものでした。

埼玉県への工場疎開

東京の空襲が激しくなり、私どもは熊谷と東松山の間の農村（埼玉県比企郡大岡村）に工場疎開をしました。工場疎開するといっても自動車などないものですから、田舎の荷車を頼んで機械を運んだ



りしたわけです。当時、従業員が30人ぐらいいましたけど、みんな毎日、背中に活字を背負って熊谷まで行き、熊谷で借りていた家に置き、そしてまた引き返してくるというように、1日2回ぐらい往復して運びました。

こうしたことから戦災は免れたわけです。疎開を手伝っている間に、自分の家が焼けてしまった従業員も何人かおりました、私は会社の大きな功労者だと思いましたが、この連中は永久に社友待遇にしようと思い決めました。この方々は今でも社友として会社に残ってもらっています。一番年配者はもう80に手が届くようになっていますが、元気に会社に来ておりました、会社が続く限り社友として待遇して行こうと思っています。

埼玉に工場を疎開しましたが、有り難いことにその頃、東京にも印刷するところがほとんどなかったものから、東京からお得意さんがわざわざ来てくれまして、埼玉で約1年半ほど何とか営業して行くことが出来ました。

それでも一日中、機械を動かしたりするほどの仕事はないものですから、午前中は工場の仕事をし、午後からは近所に借りた畑に、さつまいもを植えたり、とうもろこしや大根を植えたりして“半農半工”という生活でした。また1日1回は川に泳ぎに行ったものです。田舎ですから食糧もあるし、優雅と言えば優雅な生活だったわけです。

このように戦時中は私どもも従業員も比較的食糧事情に恵まれて、東京で非常にお困りになった人達と違った、戦争中の生活が出来たのではないかと思います。

東京復帰と社宅づくり

そして終戦を迎え、東京に復帰しようということになって、板橋に敷地を見つけて工場を作りましたが、30人近い人間を埼玉に連れて行っているものから、まさか置き去りにするわけにいきません。そこで、工場を作るよりみんなの住宅を作るほうが先になりました、こちらのほうに金がかかり、そのため借金をしました。

また、隣同士くっついていたので喧嘩したりしていけないと思い、散在するように20軒作ったわけです。あの頃は何をおいても住宅をどう確保してやるかということが、従業員に対する先決問題であったと思ひまして、まず社宅をつくり、埼玉と一緒に疎開し



た連中が引揚げてきたわけです。

借金をして作った社宅が、ご承知のように今になりますと土地も値上げしますし、逆に会社にとってはプラスになるという結果になったのですが、大半は従業員が欲しいというものですから分けてやりまして、今はそれほど残っておりませんが、今でもアパートみたいな鉄筋の住宅を作りましたので、私ども従業員の3分の1の30数名は社宅にいると思います。

仕事の面ではお得意からどんどんもらえましたので困りませんでした。住宅に苦勞して借金に駆けづりまわって、社宅を作ったということが、終戦直後の一番の私の苦勞でした。

地域社会でのいろいろな仕事

板橋に来ましてだんだん年をとってくるものですから、いろいろ地域の仕事をおしつけられてくるようになりました。例えば、板橋区の監査委員も14年ぐらやっております。この監査委員をやったことは私にとって非常にプラスであったと思います。ということは、役所の予算のたて方、あるいは執行の仕方、決算等について勉強になったからです。このことは、いま健保の理事長をしておりますが、この健保のいろいろの仕事の面で大きなプラスになっておりまして、この10何年かの監査委員をやったことは非常に有り難いことでした。

また、そのほかいろいろな仕事をおしつけられ、板橋法人会の会長も長くやりましたし、板橋体育協会の会長などやりました。(このほか地域関係での現在の公職として板橋法人会顧問、板橋災害予防協会副会長、板橋消防懇談会会長、板橋をより住みよくする会・板橋区民懇談会会長などある)

印刷工業組合についても話せばきりのないほどありますが、皆様方ご承知のことですので、省略させていただきますが、東京都知事賞は工業組合のほうでいただきましたけど、叙勲のほうは組合と関係なく、厚生省の推せんでもらいまして、これも私としては思いがけないことでした。



(6) 医療費の総点検で成果健康保険の現状と問題点**「現物給付出来高払い」は大きなガン**

健康保険組合の現状の問題について少しお話したいと思います。

私が健康保険組合の理事長になったのは向さんが亡くなった後を受け、もう 14 年になります。と同時に 2、3 年前から健保連のほうにかり出されまして、健康保険組合連合会の副会長をやっており、この副会長をやると自動的に東京の支部長をやらざるを得ないということにして、東京支部といっても全国で 1,660 余組合がある中で東京に 600 の組合があります。それから関東の協議会も会長を受けておりまして、最近では印刷健保に行くよりも連合会のほうに常勤みたいにしております。

ご承知のように今の健康保険組合制度は、現物給付出来高払いでして、お金で保険をかけるのですから、お金で戻ってくるのが本当の保険なんですが、医療だけは金で戻さずに現物給付、つまり医者が治療してくれて、薬を使ったり、診察したりした出来高で請求するという、現物給付出来高払い、というのが今の制度なんです。

私はこれが今の健康保険制度の諸悪の根源ではないかと思えます。と言いますのは、今さらいうまでもなく、健康保険で医者に行っても自分の医療費がいくらかわからないのが今の状態です。全く医者が水増しをしようと思えばいくらでも出来るし、これは誰にもわからないということです。本人がわからないのですから、組合も書類だけ見てこの支払いをするということになるわけです。ですから医者に 2 回行っていようが、3 回行っていようが実際は何もわからず、また、注射を何本されても、請求どおり組合は払わなければならないということです。

この現物給付出来高払いの欠陥が、私はあらゆる健康保険組合制度の一つの大きなガンではないかと思えますが、これはなかなか直すことが出来ないのです。例えば外国では 1 人の医者が 100 人を登録すると、100 人分の年間平均の医療費がポーンとくるわけです。ですから医療は早く患者を治せば、また、薬を少なく使えば医者が得になるわけですが、日本は反対で医者が患者を長く引っ張り、薬を多く使って儲けるというわけです。上手な医者は盲腸を 1 週間で治しますが、下手な医者は 1 ヶ月も引っ張ってしまうということで、



そのほうが儲かるという制度なんです。

この制度をなんとか是正し、外国のような登録制にするとか、あるいは点数払いというのもありまして、一つの病気に対する平均の医療費が決まっているわけで、このような一つの病気について平均の医療費を払う点数払いにするということも諸外国でやっていますから、日本でもそれを考えなくてはいけないと思います。

医療費のチェックで4億円余が戻る

もう一つは医療費払いといまして、本人がまず医者にお金を払うその金を後で保険で戻すという償還制をとると、今の医者の不正などが非常に少なくなると思います。医者の不正については、例えば死んだ人の医療費を別の医者が知らないから請求するとか、外国に出張している人の請求はする、東京から田舎に帰っているのに相変わらず東京の医者から請求がくるといふように、水増し架空請求がどうしようもないほど多いわけです。

ですから私ども印刷健保では、医療費の総点検をしようということで、医者の請求を厳密にチェックし始めました。これは大変なことなんです。東京中のレセプトがちょうど東京タワーの高さになるというぐらいですから、うちの組合でも12万人から被保険者がいて、家族が13、4万人いますから、26、7万人のレセプトは大変なものですが、これを職員が頑張ってくれて点検してくれまして、うちの組合では4億4、5千万円の医者の間違いを発見して、医者から金を戻してもらっています。これは事務局の努力の賜だと思います。これを過誤調整といいますが、いわゆる過誤調整がうちの組合は4億4、5千万円戻ってくるということで、これはよその組合にないことです。

健康保険組合といってもご承知のように、大企業が作っている単一組合がありますが、ここは単一組合ですから集計する必要もありませんので事務費もかかりませんし、大企業ですから待遇も給料も良いですし、いろいろ疾病予防施設なども行き渡っていて、医療費が非常に低いのですので、内容も大変良いわけです。

その他に3分の1は、私どものような中小企業の集っている総合組合があります。ということから大企業などは非常に安い保険料で悠悠と運営をしていますから、そんなチェックなんかしていません。チェックなどして役所と喧嘩したり、医者の機嫌を損じてまでも医療費を減らす必要がないわけですが、私どもの組合はチェックをせざるを得ないということです。



医療費を知らせる運動を展開

それからこれは私どもの組合が最初に手をつけたことですが、医療費を知らせる運動です。医療費は2ヵ月前の請求がくるわけですが、請求がきたら、あなたの医療費はいくらです、ということをして、本人と家族に分け、また、入院と外来に分けて金額を知らせておりますけど、今はまだ全部の会社に知らせるほどいっていませんが、特に医療費が非常に高い人には出しています。地方はほとんど全面的にやっていますが、東京はまだ3分の2ぐらいです。今度コンピュータ処理をしますので、全部の会社に医療費を知らせることが出来ると思います。

この医療費を知らせることによって事故がどんどん出てくるわけです。こんなに医者にかかっていないというようなことが出てきて、この結果私どもの組合は非常に有利になってきています。医者のほうが印刷健保の請求は用心しないと危いぞ、あすこは医療費をチェックしているし、また知らせているから、請求はおかしなことは出来ないぞ、と全国的に印刷健保の名前は有名になりまして、医者が非常にチェックしてくれるようになっていきます。

その結果、52年度、53年度は10億円も医療費が減り、よその組合で医療費がアップしているときに、うちの組合は逆に減り、今年はお陰で20億円の剰余金が出来たということです。こうした医療費のチェックとか医療費を知らせる運動を、うちの組合が率先してやった一つの手柄ではないかと思えます。

連合会としても全国印刷健保にならうということで、医療費の総点検と医療費を知らせる運動を盛んにやっておりますけど……。なんといっても3分の1ぐらいの組合がゆうゆうとして、料金も65とか70ぐらいの保険料で運営出来る組合が多いものですから、こうした組合ではそんな手間暇かけてやることはないのではないかということらしいんですが、連合会もなかなか全面的にやれる段階になっていないということです。それから医師会がこれに対して非常に強い抵抗をしています。全印健保では病名を知らせていると盛んに医師会系の新聞に書いておりますが、病名は個人の秘密ですから、私どもは病名を知らせずに、医療費だけを知らせることをやっています。

こうしたことで私ども印刷健保が連合会の中で、一つの大きなリーダー的役割をしているということが言えると思います。



(7) 医者の不公平是正が先決社会保険の将来の展望

医師会側の主張

ご承知かと思いますが、医師会が、健康保険組合は医療費だけを払えばいいではないか、と強く主張しているわけです。いわゆる傷病手当金などは会社の責任で払うべきであって、組合が払うのはおかしいではないか、あるいは保養施設も会社がやるべきことであって組合がやるべきではない、言っております。

しかしこれはおかしいことで、私どもは、いわゆる傷病手当金などの付加給付の金も保険料の中に含めてもらっているわけですから医者が言うように医療費の中から医者に払うものを削って傷病手当金を払っているわけではありません。

私どもも全国の方々に施設を作りましたが、これは保険料の中に保健施設費を含んで、余分な保険料をもらっているわけですから武見さん（日本医師会会長）が言うような医療費を削ってやっているわけではないのです。

もう一つは、健康保険は7つも8つにも分かれています。健康保険組合もありますし、船員保険、日雇保険、政府管掌もありますがこれらの負担がまちまちであると同時に、給付もまちまちなんです。非常に手厚い給付が出来る組合と、料率が90以上でもう破産寸前の健康保険組合もいくつかあります。ですから、日本の社会保険として、そうした不公平は許されないではないか、あくまで社会保険として統一的にやっていくべきだということを、医師会が強く主張しているわけです。

医療費の地域差の是正を

これは私も一応その通りだと思いますが、その前に健康保険を平等にする前の問題がいくつもあります。例えば医療費の地域差。ご承知のように関東と関西では医療費は2割から3割違います。同じ盲腸の手術をしても、関西でやると東京に比べ3割も高いということで、地域差があります。このことは全く人為的なことで、その医師会がいかに強いか、いかに医療費を上手く請求するか、ということで、京都あたりでは請求技術の講習会を開いているほどです。上手く審査にかからないような請求の仕方をする后感心させられるほどひどい地域差があり、私は一国民としてこれは許せないと思い



ます。

私どもは、健康保険の不公平とか不平等をいう前に、まず、診療側の公正を期すべきではないか、と思います。また、例えば沖縄はあんなに貧乏県ですが、沖縄から年間30億円の金を内地にもってきているわけです。というのは沖縄は非常に医者が少ないから、医者にかかりようがなく、医療費が非常に安く上っているのです。これは医者が都会に集中しているということで、やはり沖縄の医者を増やし、みんな医療を受けられるようにしてやらねば、不平等もはなはだしいと思います。

それから先ほど言いましたように水増し請求、架空診療、振替請求と医者が儲ける手段ばかりを講じていることに対する防衛策を考えなければなりません。私どもの支払い者側だけに公平をと言われますが、私はまず10万人そこそこの医者がまず不公平、不平等を直すのが先決だと思います。そうしたことがもし直されるならば、医師会が言うように、社会保険に今のような格差があってはいけないと思います。負担も、受ける給付も公平でなければならないと考えます。このことが社会保険の将来の展望として言わざるを得ないということです。ただ前提条件としてまず診療側の公平を期してもらいたいと思います。

財政調整には強く反対

そういう点で医師会のいう制度間の財政調整は反対であると言っているわけです。例えば政管と健康保険組合の財政調整の場合、政管は親方日の丸ですから、請求がきても右から左へ黙って払っているわけです。私どもの組合みたいにいちいちチェックして、妥当な支払いをしてないわけです。私どもはむしろ架空請求、水増し請求を黙って払うことは、理事長とか常務理事の一つの背任行為ではないかと思っています。

ご承知のように政管の健康保険は年間3千億円ぐらいの赤字を出しています。ですから困った政管と比較的裕福な民間の健康保険組合との財政調整をすることは、ザルで水をすくうようなものではないかと思っています。

私どもの主張としては、まず政府管掌の健康保険組合を、地域別の健康保険に改組してくれと言っているわけです。今の親方日の丸で日本中1本の政管では、目も届きませんし、医療費のチェックも出来ませんし、被保険者に対する疾病予防も何も出来ませんので、

私は2万人程度の範囲内で地域健康保険組合を作るべきだと思います。

その証拠に、私ども総合組合といっても体質は政管とほとんど同じなんです。中小企業であること、まして印刷健保は全国組織であるということで、全く同じ範疇の健康保険組合です。にもかかわらず、医療費の額にしろ、受診率にしろ、3割方も違うんです。

ですから政管を健康保険組合に改組出来たら3割近い医療費の節約が出来るはずですよ。そうすると補助金を出している3千億円ぐらいの金はゆうに浮くはずですよ。私どもの組合だけでも年間で10何億の金が浮くわけですから、今の政管を改組すれば必ず赤字はなくなるはずですよ。

私は、厚生省の局長あたりに、「健康保険組合を作るのがそんなに大変なら、われわれ民間人に世話させてくれ、民間人が面倒をみようではないか」と言っているわけですが、これからの健康保険組合は親方日の丸で、金が足りなければ国からいくらでも補助金があるんだというようなことではいかんと思いますね。

こうした点で連合会としてもいろいろ運動をしておりますが、幸い経団連の土光会長あたりも強く医師会のいう財政調整に反対しており、連合会と一緒に闘おうと言っております。財界も反対しているということは政治家とか役所には痛いことだと思います。そうした状況の中ですから医師会の言う財政調整はなかなか出来ないのではないかと思います。

広い視野で将来を考え

最近の情勢として、ご承知のように国鉄や労働省などあらゆる役所が共済組合をもっていますが、これは、早い話が健康保険組合です。また、年金も扱っています。ですから役所は厚生省の管轄外で健康保険をやっているわけです。これも一緒に財政調整しようと言いはじめたのですが、これは実際には出来ない相談です。

私は、自民党の頭の良い人が、財政調整をやらないというわけにいかないから、医師会に対して実際は出来ない相談をもちこんで、役所の共済組合も一緒に財政調整をしようということは、実際上出来ないのではないかと考えています。しかし一方において、先ほど言いました制度間の不公平是正という思想はちっとも変わっていませんので、今後何らかの形でこれまで申しあげたことが必ず出てく



ると思います。

そういう点で私どもは、これからの社会保険については、自分の組合のこととか、自分の業界のことだけではすまなくなりました。日本の社会保険をどうするかという観点に立たないと、社会保険の解決はあり得ないと思います。

ご承知のように、当組合では東京が大体年間6～7億の黒字が出ております。それから地方が赤字ですので、地方からは保険料以外に1人1千2百円分の手当金をもらっています。これは事業主負担ですから大変なことなんです。百人の会社ですと、年間5～6百万円になるとは思います、それを地方では黙って出して下さっている。

一健保組合内の論議を越えて

印刷健保は全国組織なので、東京、静岡、神奈川は金が残りますが、他の地域は赤字だということで、東京独立論などがもう10年も前から出ております。しかし、地方には地方の言い分がありまして若い青年は東京へ去ってしまっていて地方は年寄りばかりの業界なのに東京はうまい汁ばかり吸っているのではないかなどと言われますし、東京としても東京だけ独立すれば年間6、7億の金は浮きますから非常に有利にはなりますけど、もう時代が変わってきて、同じ全印健保の中でどこの地域が赤字とか、黒字だとか言っている時代はもう過ぎました。

といいますことは、今度連合会で健康保険組合の財政調整をやりまします。これは困った組合には裕福な組合から金を出そうということですが、そのように自分の業界外にさえ金を出し合って、社会保険を守って行こうという時代になりましたので、全印健保だけがどこの地域が損する、得をするという時代は過ぎたと思います。

私は今の全印健保の負担の公平を期すために、東京の黒字分ぐらいは地方で分担金を出してもらいたいと思います。そして東京の負担も、地方の負担も出来るだけならして、東京がこれだけ黒字を出しているから、地方もこれだけ金を出してくれと言うことは私はやっていくべきだと思いますが、もううちの組合だけで、どうこういう時代は過ぎて、日本社会保険全体をどうするかという観点に立って考えていくべきだと思います。

この制度が出来ると、例えば東京が独立しても東京のあまった金は他の産業にもっていかれます。それでは東京が何のために黒字を



出しているのか、どうせ金を流すなら同じ業界の中にすべきだと思います。そういう点で出来るだけ全印健保の負担の公平、いわゆる分担金制度など、ここ数年なくすことは出来ないと思いますが、もっとお互いに視野を広くして、日本の社会保険全体をどうするかという観点に立たないと、これからの健康保険はやって行けないと思います。

そういう点から今後の社会保険の見通しとしては、あくまでも広い地域の社会保険になって行き、お互い負担の平等、同じ給付を受けるというように健康保険も変わってくると思います。

